

動詞「しく」の意味用法をめぐって

森脇 茂 秀

一、はじめに

稿者は、比況表現の史的変遷過程を明らかにするために、森脇(二〇〇四)、(二〇〇七)で、仮名文学作品に用いられた「似る」の意味用法を、森脇(二〇〇六)では、「ごとし」の文体論的出現状況を中心に考察を行った。その結果、特に、動詞「似る」については、次のような結論を得た(必要な部分を纏めて示す。以下、傍線稿者)。

・「似る」は、否定辞と共に用いられる用法が多数であり、この点では、「ゴトシ」というよりも、漢文訓読語「シク」(「シカズ」等)に近似の性質を有する。

・否定辞と共に用いられる「似る」否定形は、形式名詞「もの」や「べし」が介在する用法があり、この用法は漢文訓読語「シク」と共通性がある。

・否定辞と共に用いられない「似る」肯定形は、「り・たり」と共に用いられる。例外は「似て」形であるが、極めて少数である。

・「り・たり」と共に用いられない「A、Bに似る+否定辞」の用例にお

いては、概して、Aは、具体的な事柄や抽象的な事柄があり、Bには「一般性」や「標準的」といった性質が認められる。

この中で「似る」の意味用法は、所謂漢文訓読語「シク」との共通性が高い、ということを経験として提示したのであるが、仮名文中に表れた「しく」の意味用法との比較対照については、その詳細を十分に明らかにせず、言及が不十分であった^{注1)}。

そこで本稿においては、仮名文中に表れる「しく」の意味用法について考察しようと思う。

現代語の場合、動詞「しく」は、「百聞は一見にしかず」「三十六計逃ぐる(逃げる)にしかず」等のような格言、或いは諺等に残るのみであり、常に「ず」「なし」のような否定語を伴う。

そこで、「しく」が表れる作品毎の用例数を表にして示すと、次のようになる(表1)。

以下、各時代毎に「しく」の意味用法を考察することにする。

表 1

作品名	成立年代	用例数	備考
万葉集	(759)	12	(除外)「しけ」 1
東大寺諷誦文稿	(830?)	1	には如か不(ジ)
竹取物語	(859?)	0	
古今和歌集	(905)	0	
延喜式祝詞	(905-927)	0	
伊勢物語	(900?)	0	
土左日記	(935)	0	
後撰和歌集	(951)	0	
大和物語	(956)	0	
蜻蛉日記	(974)	1	和歌 数にはしかじ
三宝絵詞	(984)	9	
落窪物語	(988)	0	
枕草子	(1002)	1	しく月はなし
和泉式部日記	(1004)	1	和歌 月にしかじ
源氏物語	(1008)	3	
紫式部日記	(1008)	1	にしくべいやうのなければ
堤中納言物語	(1005)	0	
更級日記	(1060)	0	
栄花物語	(1060)	0	
夜の寝覚	11世紀後半?	0	
大鏡	(1086)	0	
法華百座聞書抄	(1110)	0	
古本説話集	(1126~1201)	0	
佛教説話集	(1140)	7	シカジ6 シク 1
詞歌和歌集	(1151)	0	
梁塵秘抄	(1169)	1	しくはなし
三教指帰注	院政後期	0	
宝物集	(1178)	0	
千載和歌集	(1188)	1	
宇治拾遺物語	(1210頃)	0	
方丈記	(1212)	4	
保元物語	(1221)	4	
平治物語	(1221?)	1	
宝物集	(鎌倉初期)	0	
延慶本平家物語	(1309)	17	
徒然草	(1330頃)	12	
遊仙窟	(1344)	1	しくものなし
湯山聯句抄	(1504)	1	シカヌヅ
中華若木詩抄	(1534?)	11	
天草版平家物語	(1592)	7	
天草版伊曾保物語	(1593)	4	
天正狂言本	(1578?)	1	しくはなし
大藏虎明本狂言集	(1642)	1	しくはなし
大藏虎清本狂言集	(1646)	0	
きのふはけふの物語	(1624)笑話	1	しく事なし
醒睡笑	(1623~8) 笑話	7	しくはあらじ2
雨月物語	(1768~76)	2	しかず2
計		112	

二、上代の「しく」―「万葉集」の用例―

「万葉集」には「しく」の用例が12例存する。以下、用例に則してコメントする。

「用例1」穂積皇子に勅して、近江の志賀の山寺に遣はず時に、但馬皇女の作らず歌一首

背 後れ居て恋ひつつあらずは追ひしか(及)む道の隈回に標結へ我が
(巻二 一一五)

「用例1」は、「後に残つて恋しく思つていくらいなら、跡を慕つて追いつきたい。道の曲がり目ごとに印を付けておいて下さい、あなた。」(「新大系」)と解釈できる用例である。ここでの「しく」は、後世のような「否定語」と共起する用法ではなく、否定語を伴わない、

助動詞「む」と承接し、「しかむ」形となっている点、特筆される用例である。また、ここでの「しく」は「追ひしく」と複合動詞であり、「追いつく」という意であるが、「しく」の対象が「に」で表出していないという点も注目される。

〔用例2〕反歌

今日の日にかにか及かむ（及）筑波嶺に昔の人の来けむその日も

（巻九 一七五四）

〔用例3〕夜光る玉といふとも酒飲みて心を遣るにあに及か（若めやも）

（巻三 三四六）

〔用例4〕勝鹿の真間娘子を詠む歌一首 并せて短歌

（略）錦綾の中に包める斎ひ兒も妹に及か（及）めや（略）

（巻九 一八〇七）

〔用例5〕反歌

銀（しろかね）も金（くがね）も玉もなにせむに優れる宝子に及か（斯迦）めやも

（巻五 八〇三）

〔用例2〕は「今日の日にどうして及ぼうか、及ばない」、〔用例3〕はその前に「あたひなき宝といふとも一杯の濁れる酒にあにまさめやも」とあり、その対比として、「しかめやも」とある。『新大系』は、「あたひなき宝」を漢文訓読の語法と指摘し、ここでは漢文訓読的要素を指摘できようが、副詞「あに」とあることから「酒を飲んで心をはらすことに何でまさろうか。まさりはしない」と所謂「反語」として解するべきであろう。〔用例4〕も〔用例2〕、〔用例3〕と同じく「反語」として「錦や綾の中に包んだ、大切にしている子ども

もどうして及ぼうか。及ばない」と解することができる。〔用例5〕は「どうして子というすぐれた宝に及ぼうか、及ばない」という意であるが、ここで『新大系』は、〔用例3〕と同じく「漢文を訓読したような歌」と指摘する。

〔用例6〕紅はうつろふものそ椽（つるはみ）のなれにし衣になほ及か（之可）めやも

（巻十八 四一〇九）

〔用例7〕椽（つるはみ）の衣解き洗ひ真土山本つ人にはなほ及か（如）すけり

（巻十二 三〇〇九）

〔用例8〕帥伴伴卿、吉野の離宮を遙かに思ひて作る歌一首

隼人（はやひと）の瀬戸の巖も鮎走る吉野の瀧になほ及か（及）すけり

（巻六 九六〇）

〔用例9〕黙居りて賢しらするは酒飲みて酔ひ泣きするになほ及か（如）すけり

（巻三 三五〇）

〔用例10〕大伴坂上郎女の晩の萩の歌一首

咲く花もをそろは厭はしおくてなる長き心になほ及か（如）すけり

（巻八 一五四八）

〔用例11〕他田広津娘子が梅の歌一首

梅の花折りも折らずも見つれども今夜の花になほ及か（如）すけり

（巻八 一六五二）

〔用例6〕は「つるばみで染めた地味な衣（連れ添った妻）にやはり及ぶはずがない」と解釈でき、〔用例7〕は〔用例6〕の類歌であるが、文末が否定語を伴い「すけり」となっている。また、「に」と「は」とが連接した「には」形となっており、注目される。

「用例8」は「吉野の瀧の激流にはやはり及ばない」と解釈できるが、

「用例6」「用例7」と同じく「に・なほ・しく」と副詞「なほ」と

共起し、文末が「けり」で終止する形となっている⁽¹⁰⁾。この形は、定型化しており、「用例9」「用例10」「用例11」の如くである。

「用例12」百重にも来しか(及)ぬかとも思へかも君が使ひの見れ

と飽かざらむ

(巻四 四九九)

「用例12」は、『大系』頭注に「来及かぬかも一重ねて来ないかなあ。シクはシキリニ……スル意。又カモは願望の助詞。」とあり、『新大系』では、「来しかぬかも」は願望。動詞「しく」は、物事が重ねて頼りに生ずる意」とある。ここでの「ぬ」は打ち消しではなく「ぬかも」で願望を表す、という点では、両注釈書は共通しているが、ここでの「しく」は、『万葉集』の他の用例からすると「追いつく」という原義から「匹敵する」「およぶ」といった意と捉えることができるであろう。

また、ここでは、文末が「しく」+否定辞「用法と同じく、文末が「未定形」と捉えると、その共通性が指摘できるように思われるが、その点、『時代別 国語大辞典 上代編』に指摘する「しく」【考】の項「常に否定的な形で使われた語か」との指摘は、実際の「万葉集」中の「しく」の用例の大勢は、否定語と共に共起しているが、否定辞を伴わない肯定形のみ用法もあり、この「用例12」はその中間的性格として捉えることができるように思われる。

三、中古の「しく」

「用例13」孔雀ハウルハシウカザレル色ナレドモ、カリノツバサノトヲクトビニハシカズ。(略)トノ給ヘリ。

(「三宝絵」下 僧宝 138頁)

「用例14」二月も十よ日になりぬ。(略)みるにも、かやうのことは思ひかけざりしものを、など思へば、いみじうて、

うち払ふ塵のみ積もるさむしろも嘆く教にはしかじとぞ思ふ

(「蜻蛉日記」中巻 天祿二年二月 212頁)

「用例15」道慈律師ノ云ク、「(略) 神ノ心ヲヨロコバシメテ、寺ヲマボラシメム事ハ、法ノ力ニハシカジ。」ト云テ、大般若教ヲカキヲキテ、此会ヲハジメオコナヘルナリ。

(「三宝絵」下 大安寺大般若会 五六日 183頁)

「用例16」我ならぬ人もさぞ見(み)んなが月の有明の月にしかじあはれば (「和泉式部日記」421頁)

「用例13」は、『三宝絵』の会話文中の「しく」の用例であるが、『万葉集』の「しく」の用例と同じく助動詞「ず」と承接し「しかず」形となっている。但し、ここでは副詞「なほ」、助動詞「けり」とは共起しておらず、先行する助詞が「に」のみではなく係助詞と連接した「には」となっている点は、『万葉集』「用例7」の用例と同等のものである。

「用例14」は、『蜻蛉日記』和歌中に表れた「しく」の用例で、『全集』頭注に、「如かじ」に「敷かじ」をかける。」との指摘があり、「うち払う筈の塵の多さ、あの人の訪れもなく、こんなにも積もったこ

の塵の数も、わたしの嘆きの数にはとても及ぶまいと思うことだ」と解釈できる。ここでは、「ず」ではなく、助動詞「じ」と承接して「にはしかじ」形となっており、「万葉集」の「しく」の用法とは異なっている。

〔用例15〕は、「三宝絵」の会話文中の用例で、「用例14」と同じく助動詞「じ」と「しく」が承接し「にはしかじ」形となっており、〔用例16〕は、「和泉式部日記」の和歌中の用例であるが、助動詞「じ」と承接し、「にはしかじ」形となっている。

また、「三宝絵」に表れた「しかじ」形には、次のような用例がある。

〔用例17〕王ノ宣給ハク、「更ニ然カセジ。戒ヲ破テ空シク生ケラムヨリハ、不如ジ、戒ヲ守テ早ヤク死ナムニハ。」(略)「ト云テ還リ至リス。」(「三宝絵」上 二 持戒波羅密 16頁)

〔用例18〕コ、ニミツカラオモハク、「是ハ昔ノムクヒニヨリテ所招病也。コノヨノ事ニハアラジ」ト思テ、「ナガイキシテ人ニクマレムヨリハ、シカジ、功德ヲツクリテヤクシナムニハ」ト思テ、(略) (「三宝絵」中 五 衣縫う伴造義通 100頁)

〔用例19〕マコトノ位、カリノ迹(あと)、カレモコレモシリガタシ。シカジ、ミナ敬ハムニハ。内ノ徳、外ノ形、サダメガタシ。シカジ、シベテ嘆(ほめ)むには。(「三宝絵」下 僧宝 138頁)

〔用例17〕は、「会話文」中の用例であるが、これまでとは異なり「しかじ」が先行し、「む・には」が文末に出現する、「しかじ・…むには」形となっており、所謂「倒置表現」となっている。他に「心話文」中の〔用例18〕、「地の文」の〔用例19〕も「しかじ・…む

には」形であり、文の種類の特徴からすれば、会話文、心話文、地の全文てに出現しており、この形は、「三宝絵」においては、偏りなく用いられたと考えられるであろう³⁰⁾。

〔用例20〕節(せち)は五月にしく月はなし。菖蒲(さうぶ)・蓬(よもぎ)などのかをりあひたる、いみじうをかし。

(枕草子 三十九段 85頁)

〔用例21〕(源氏)「略」唐土には、春の花の錦にしくものなしと言ひはべめり。やまと言の葉には、秋のあはれをとりたてて思へる、いづれも時々につけて見たまふに、目移りてえこそ花鳥の色をも音をもわきまへはべらね。(略)「と聞こえたまふに、(略)

(源氏物語)薄雲(二) 452頁)

〔用例22〕(中将)咲きまじる色はいづれと分かねどもなほとこなつにしくものぞなき大和撫子をばさしおきて、まづ塵をだになど、親の心をとる。

(源氏物語)帚木(一) 159頁)

〔用例23〕中将、「その織女の裁縫方方をのどめて、長き契りにぞあえまし。げにその龍田姫の錦にはまたしくものあらじ。はかなき花紅葉といふも、をりふしの色あひつきなくはかばかしからぬは、露のはえなく消えぬるわざなり。(略)」と、言ひはやしたまふ。

(源氏物語)帚木(二) 153頁)

〔用例24〕少將の君は、秋の草むら蝶鳥などを白銀(しろかね)してつくりかがやかしたり。織物はかぎりありて、人の心にしくべいやうなれば、腰ばかりを例にたがへるなめり。

(紫式部日記) 453頁)

〔用例25〕女の殊に持たむは、薬玉品に如くは無し、如説修行年経

れば、往生極楽疑はず。〔梁塵秘抄〕巻第二 153 47頁

〔用例20〕は「枕草子」の用例で、当該箇所の三巻本文は「五月にしく月はなし」、能因本文は「五月にしくはなし」となっており、体言「月」の有無の差があるが、この用例は、「しく」の確定例であると考えられる。ここでの「しく」の対象は、「節句」という複数の選択肢のなかでの比較であり、そこで「にしく（体言）はなし」が用いられた、と考えられる。また、ここでは「漢文訓詁」的な用語は出現していない。

〔用例21〕は、「源氏物語」の「会話文」中の用例で、〔用例20〕と同じく、「にしくもの（体言）なし」形である。〔用例22〕は、「源氏物語」の「和歌」中の用例で、「入りまじつて咲いている花の色は、どれがとくにすぐれていると区別がつかないけれども、やはり、常夏―あなたに及ぶものはありません」と解釈できる。この用例は、「にしくもの（体言）なし」形であるが、副詞「なほ」が先行している点、「万葉集」の用法との関連を想起させる。〔用例23〕は、「源氏物語」の「会話文」中の用例で、『全集』頭注には「如く」と「敷く」とをかける」との指摘があるが、ここでは、「には」と「しく」との間に副詞「また」が介在しており、万葉集中の「なほ」のような出現位置に注意したい。また、ここでは「用例20」等のように「にしくもの否定語」となっているが、ここでは、否定語が「あらじ」となっている。

〔用例24〕は、「紫式部日記」の用例で、「織物は身分によって制限があって、着る人の思いのままにはならないので。」と解することができるが、ここでは「やう」が体言として表出しており、これまでの用法とは異なっている。〔用例25〕は「梁塵秘抄」の用例で

あるが、「もの」等の体言が表出していない、「にしくはなし」形となっており、『新大系』は、「最高である」即ち最上級を表すとす。このように、中古の仮名文中における「しく」の用例を調査すると、「にしくはなし」形は固定化していると考えられるが、その一方で、

〔用例26〕天治元年大嘗会悠紀方風俗歌、近江国千坂の浦をよめる
参議俊憲

君が代の数にはしかじ限りなき千坂の浦の真砂なりとも

〔千載和歌集〕巻第十 賀歌 637 196頁

〔用例26〕のように、和歌中に用いられた「しく」で、「にはしかじ」形も存していることを指摘しておきたいと思う。またここは「君が代の長久の年数には及ぶまい。限りのない千坂の浦の真砂（無限）の数であっても。」と解釈できよう。注4。

四、中世の「しく」

中世後期の「しく」の意味用法について、「日葡辞書」には、つぎのように立項している。

・ Xicai シカジ（如かじ）
・ xiqu シキ、ク（如き、く）

「日葡辞書」には、肯定形、否定形面形が掲載されているが、ロドリゲス「日本大文典」には、更に詳しく動詞「しく」に関して言

及した部分がある。それらを纏めて示すと、次のようになる。

○Ni(に)・Nimo(にま)

○動詞の Niru(似る)・Xiqu(如く)・Coto narazu(異ならず)・Voyobu(及ぶ)・Arazu(非ず)・Vonaji(同じ)は、Ni(に)を伴った不定法をとる。読むには如かじ(xicaji)〔日本大文典〕95頁

○Xiqu(如く)はすぐれてゐるといふ意であつて、肯定活用に次の形がある。Xiqu(如く)・xicanya(如かんや)・xican(如かん)・xicubequinanaxi(如くべきはな)。○否定活用にXicanu(如かぬ)・xicazu(如かず)・xicaji(如かじ)・xicubecarazu(如くべからず)。例へば、「己に如かざる者を友とする事なかれ。(無友不知己者)「論語」卷一〔日本大文典〕185頁

まず、「しく」に関して、助詞「に」「にも」と共起する、という指摘は、重要である。また、原義は「すぐれている」とし、肯定形として終止形の「しく」、また助動詞と共に用いられた「しかん」を指摘し、否定形として「しかず」「しかぬ」「しかじ」「しかべからず」両形を挙げており、考察する上でも重要な指摘である。

以下、実例に則してコメントする。

〔用例27〕昔、齋衡のころとか、大地震ふりて、東大寺の仏の御首落ちなど、いみじき事どもはべりけれど、なほこの度にはしかずとぞ。〔方丈記〕33頁

〔用例27〕の用例は、副詞「なほ」が「しく」に先行しており、「に

はしかず」形となっている。この用例は、「それでも今度ほどではなかつたということである。」と解釈できるが、「方丈記」においては、他に「にはしかず」形が2例、「にはしかじ」形が1例存する。また、「しく」に先行する助詞は「には」であり、「方丈記」の統一的な用法を捉えることができるであろう。

〔用例28〕文字の法師・暗證の禪師、たがひに測りて、己にしかずと思へる、共にあたらす。〔徒然草〕第九十三段 249頁

〔用例29〕康頼、「ソレヲバ頸ヲ取ニハ不如(しかず)トテ、瓶子(へいじ)ノ頸ヲ取テ入ニケリ。〔延慶本平家物語〕上 第一本 70頁

〔用例30〕禹の行きて、三苗(さんべう)を征せしも、師(いくさ)を班(かへ)して、徳を敷くにはしかざりき。

〔徒然草〕第七十一段 229頁

〔用例31〕樂欲する所、一つには名なり。名に二種あり。行跡と才藝との誉なり。二つには色欲、三つには味なり。萬のねがひ、この三つにはしかず。これ、顛倒(てんだう)の相よりおこりて、若干のわづらひあり。もとめざらんにはしかじ。

〔徒然草〕第二百四十二段 288頁

〔用例32〕蝉ガ喧シウ鳴クモ文殊ノ口ト同モノデ、維摩ノ一黙ニシカヌゾ。〔湯山聯句鈔〕虞韻 372頁

〔用例33〕凡夫は貴人・高家の傍に近付くことは無益ぢや。もしその顧みがなくは、たちまち氣に違ひ、禍に会はずれば、ただ貧樂にはしかぬ。

〔天草本伊曾保物語〕鼠のこと 下心 449—7 83頁

〔用例34〕後寛それをばなんとせうぞといはれたれば、西光法師首をとるにはしかぬと、言ひさまに、瓶子の首をとつてうちに入られた。
〔天草本平家物語〕20—4

〔用例28〕は、「に・しかず」であるが、比較の対象は「己」であり、「たがひに測」るのである。〔用例29〕は、「しかず」の対象が「に」によって示され、複数の選択肢の中で最良の選択と捉えることができる。〔用例30〕も、「しかず」の対象が「に」によって示され、また「に（は）しかず」と「き」とが承接した、「にはしかざりき」形となっている。〔用例31〕は、「にはしかず」と「にはしかじ」とが近接した場面で用いられている用例であり、「にしかじ」形は中古から出現するのであるが、ここでは、「に」と「は」の連接した「にはしかじ」が見受けられ、「には」で示された「しく」の対象は、その中で最高の選択、と捉えられる。

また、〔用例32〕〔用例33〕〔用例34〕は、「日本大文典」が指摘する「に（は）しかぬ」形の用例であり、これらは中古には見られない。尤もこの形は、「にしかず」形の「ず」が「ぬ」に変容した語形であると捉えられるが、「日葡辞書」では、「ににしかず」「にしかぬ」形が掲載されずに「（に）しかじ」形のみとなっているのである。

一方、「しく+否定語」形は、キリシタン資料においては、これまで見られた「じ」ではなく、「にはしくまじい」形が出現する。以下用例を示す。

〔用例35〕（略）心に思ふやうは、「さても、我らが業ほど、もの憂いことはあるまじい。山野を家にし、田畠に汗を流し、水を耕し、

雨を植ゆることは、かやうの料簡を弁（わきま）へぬ故ぢや。只今から一跡を沾却して、船の上の商ひをするには、しくまじい」と思つて（略）

〔天草本伊曾保物語〕大海と野人の事 472—14 131頁）
〔用例36〕（略）譬へを述べて言ふは、「（略）その時狼が心に思ふやうは、『武略をもつて誑（たぶら）かさうにはしくまじい』と（略）」と言ひ終つて、（略）
〔天草本伊曾保物語〕429—7 52頁）
〔用例37〕さあればこれから都へ上つて妻子を見てのち、妄念を離れて自害せうにはしくまじいと定められたと、聞こえまらした。

〔天草本平家物語〕巻第四 290—22）
〔用例38〕うき世を厭うて、まことの道に入らうずるにはしくまじいと言つて、（略）
〔天草本平家物語〕巻第四 307—8）

〔用例39〕ただお様を変へさせられて、この後世を弔はせられうずるにはしくまじいと、申したれば、北の方げにもとあつて、泣く泣く様を変へて、かの後世を弔はれたと申す。

〔天草本平家物語〕巻第四 323—16）

〔用例35〕から〔用例39〕までが、その用例であり、その中で、〔用例36〕は、「計略をもつてしてだましてやろう」という意であるが、「日本大文典」には、「Xiqu」（如く）。勝つてゐる。例へば、これに如かぬ。武略を以て誑かさうには如くまじい。」の用例に対して、「脚注」で、1593年刊天草版伊曾保物語の文であつて、それには末尾がxicunaji（如くまじい）となつてゐる。「と指摘し、「まじ」から「まじい」への変容を指摘する^{〔註〕}。

また、否定語を伴わない「しく」の用法も存する。

〔用例40〕彼ヲ聞、是ヲミルニ、「誰ニ讓テカ歎カザラム。何ツヲ期シテカ勤ザラン」ト、深く思召取テ、眞実報恩ノ道ニ趣キ、解脱ドウサウノ衣ヲ染御す。実ニ善知識者、大因縁也。何事カコレニシカム。
〔延慶本平家物語〕下 第六本 427頁

〔用例41〕その趣は、「今我、天にも地にも付かぬ宮殿樓閣を一つ建立せうとの望みぢや。願はくは、その国から作者一人を遣はされ、不審の様をも開かせたらば、何の幸ひかこれにしかうぞ」(XIX?)
〔略〕と書かれた。
〔天草本伊曾保物語〕434—7 58頁

〔用例40〕は、「延慶本平家物語」の用例で、「何事」と疑問詞と共に用いられ、形態上は、否定語はなく「にかむ」と肯定形になっている。〔用例41〕も、否定語を伴わない「しく」の用法であるが、やはり「なに」という疑問詞と共に用いた用例であり、「しかうぞ」となっている。ここでは、「これ以上の幸ひはありませんまい」と解釈できるが、この用例の文末詞「ぞ」について、「句の中に或疑問名詞がある場合には、常にその疑問を表すために助辞²⁰(ぞ)を終に置く。疑問名詞が先行する場合、それは単なる疑問の標しに過ぎない。」と「日本大文典」に指摘があり²¹、意味的観点からしても、「反語」という否定的な意味を表すと考えられることから、「しく+否定辞」形との共通性を指摘できるであろう。

〔用例42〕欲を成じてたのしびとせんよりは、しかじ、財なからんには。癪(よう)・疽(そ)を病む者、水に洗ひてたのしびとせんよりは、病まざらんにはしかじ。こ、にいたりては、貧富分(わ)

く所なし。究竟(くきやう)は理即(りそく)にひとし。大欲は無欲に似たり。
〔徒然草〕第二百七段 265頁

〔用例43〕サレバ楽天ノ詞ニハ、「人木石にあらざれば皆情けあり。不如傾城ノ色ニ相アハザラムニハ(けいせい)の色にあはざらむにはしかじ」ト宣ヘリ。今此事ヲ思ニモ、身ヲ山林ノ間ニ宿シ、命ヲ仏陀ニ仕奉テ、「略」ノ文ヲ憑(たのみ)テ、シカジ出家ヲセバヤトゾ思ケル。
〔延慶本平家物語〕下 第五末 328頁

〔用例44〕人々は聞テ、「略」設(たとひ)一方ヲ打破テ通りタリトモ、朝敵(てうてき)ト成ヌル上ハ、ツイニ安穩ナルベカラズ。シカジ、人手ニ懸(かか)ラムヨリハ、各自害ヲスベシ」ト云ケルバ、(略)
〔延慶本平家物語〕上 第二末 513頁

〔用例45〕「サリトテ此事宮マデモ、衆ニ交ラム事、人ナラズ、只カ、ル身ニテハ、世ニ有テモ何(いか)ガハセム。シカジ、出家人道(しゆつけ)にふだうシテ失(うせ)ナム」トゾ、思ナリニケル。
〔延慶本平家物語〕上 第3本 580頁

〔用例46〕シカジ、タゞ衣ヲウチ振ウテ、一片ノ田地ヲ耕テ居ルホドノコトハアルマイゾ。
〔中華若木詩抄〕102「夢山居」122頁

〔用例42〕から〔用例46〕は、「しかじ」が先行し、倒置的表現であると考えられる用例である。〔用例42〕は、「しかじ・んには」とあるが、このように文末を、推量の助動詞「ん」と「には」が承接した「んには」で結ぶ形式は、中古に見られた〔用例17〕のような「むには」の用例と同質のものであると考えられる。また、この用例では、後接部に「にひとし」「に似たり」とあり、それらと「に

〔はしかじ〕との共通性を指摘できる。〔用例43〕は、「にはしかじ」形も出現するが、その直後に、「しかじ」が先行し「シカジ」出家ヲセバヤ」と倒置形で、しかも助詞「ばや」で終止しており、「用例44」は、文末が「べし」、「用例45」は文末が「なむ」、「用例46」は「まい（ぞ）」とある。

このように「しく」倒置表現においては、「しく」は「じ」と承接した「しかじ」形のみであり、また、「む・には」で文が終止する前代と同用法のものと共に、「ばや」「む」「べし」「まい」といった「未実現」の助辞と共に起する用法が中世期に出現するのである。

〔用例47〕サテ平山申ケルハ、「ツクハ」世間ノ相（さう）ヲミルニ、直（あた）ヒ代リハナケレドモ、大事ノ空ヲユヅルハ父母ニ親（おぼにしん）ニシクハナシ。（略）トゾ悦ケル。

〔延慶本平家物語〕下 第五本 191頁
〔天正狂言本〕もち酒
〔用例48〕ふし「松の酒宿梅つほの、柳の酒にしくはなし」。

〔用例49〕それ神代の御時は、そさのおの尊と現じ、あめつち開けはじまりしより、此かた、当所出雲の大社を宮居し、仏法を守護し、人民をはごくみ、国土ゆたかに守り、弓矢の家をもつはらとし給ふ事も、是皆当社の御神に、しくはなし、有難かりしためしなりと、祝詞を申納めて（略）

〔大蔵虎明本狂言集〕中 のつとうかくら 281頁
〔用例50〕先ツ目出度コトナルホドニ、アワレ、コノ夢ガ合ヘカシ、トノカクニ祈禱スルニシクハナイホドニ俄ニ香ヲ焚キ替ヘ、灯ヲ別ニトボシカヘテ、鬼神ヲ礼シテ（略）ト云ゾ。

〔中華若木詩抄〕227「征婦詞」261頁

〔用例51〕しかればことはを学びがてらに日域の往時をとむらふべき書これ多しといへども、なかんづく叡山の住侶、文才に名高き玄恵法印の制作平家物語にしくはあらじと思ひ、これを選んで書写せんと欲するに臨んで、（略）〔天草本平家物語〕序 2—28

〔用例52〕下官ヲ視テ曰ク・新一婦・ツクハ人を見ルこと多シ。少一府一公に如クモノ無シ・少府公は乃（ち）・是・仙一才なり。

〔醍醐寺藏本 遊仙篇〕13ウ8 109頁
〔用例53〕（略）秋雨梧桐葉落時ト作り、雨滴梧桐秋夜長ナンドト云テ、百感ヲ催スハ雨ニシクモノハナイゾ。

〔中華若木詩抄〕218「落葉」251頁
〔用例54〕師ここに於て予に示し給ふは、工匠の家屋を作らんと欲するには、まづその器物を利くし、漁人の魚鱗を得んと思ふときんば、退いて網を結ぶにしくことなし。

〔天草本平家物語〕序 2—14

〔用例47〕から〔用例50〕は、「しくはなし（ない）」の用例で、「及ぶものはない」「最良の選択である」と解釈できる用例である。例えば、〔用例48〕は、「柳の酒に及ぶものはない」「及ぶものはない。かなうものはない。いちばんよい。「しく」は追いつく。及ぶ。匹敵する。」等と解することができるが、〔用例49〕の「しく」の対象は、「に」によって示されているという事は、中古の用法「しくはなし」形と同一である。また、〔用例51〕は、「なし」が「あらじ」となっているが、これも同様に捉えてよいであろうと思われる。

また、〔用例52〕は「しくものなし」、〔用例53〕「しくものはない

(ぞ)、「用例54」「しくことなし」であり、「しく」の対象、比較の基準は、格助詞「に」によって表されている点、「しくはなし(ない)」と同じであって、「しく」と否定語との間に介在する体言は、中古の「しく」のような「月」「とこなつ」といった具体的な体言ではなく、「もの」「こと」といった所謂形式体言であることも特徴の一つである。

五、おわりに

以上、時代を追って「しく」の意味用法を考察した。

その結果、「しく」が肯定形として用いられるのは、上代に限られること、中古以降は、否定辞と共起すること、中古では副詞「なほ」と共起する用例が多いこと、また否定辞と共起しない場合は、疑問詞と用いられるが、意味的には否定となること、倒置表現は「しかじ」に限定され、その文末は「む」などの「未定形」を表す助詞と共起すること、等が明らかとなった。

右のような結果からも、動詞「似る」と「しく」とは、否定辞と共起する用法が多く、対象が格助詞「に」によって示されること等を勘案して、近似の性質を有する、と考えられる。

他の語形との比較については、今後の課題としたい。ご教授賜れば、幸いである。

(尚、本文は「源氏物語」は、小学館『日本古典文学大系』、その他は岩波書店『日本古典文学大系』『新日本古典文学大系』に依った。また、必要に応じ、各種索引、注釈書を利用した。)

(注)

(注1) 漢文訓読語「シク」は、所謂一般的な概説書によれば、「比較」乃至は「選択」として指摘され、「百聞は一見に如かず。」のような「しかず」は、「二つのものの比較」、「臣を知るは君に如くは莫し。」は「多くのもののうちでの比較。」と説かれることが多い。また、「しく」の対象、比較の基準は、格助詞「に」、または「に」と「は」とが複合した「には」で示される、と指摘される。

(注2) 『大系』頭注に「やっぱりおよばないなあと感じる。ナホはヤハリの意。(略) ナホは、肯定の場合は、その上に加えての意。否定の場合は、全く、全然の意を表わす。ケリは感動を新たにする意。」と指摘がある。

(注3) また、一方で、「しかじ・・・むには」形は、「倒置法」という性格からして、多分に「文章語」的であるとも考えられる。

(注4) この和歌は、「君が代は限りもあらじ長浜の真砂の数はよみつくすとも」(古今和歌集「神遊歌」をふまえており、「しかじ」と「あらじ」との関係が注目される。

(注5) 『日本大文典』381頁参照。「じ」から「まじ」への変遷過程や「まじ」と「まじい」との関係についても言及すべきであるが、紙面の関係でここでは、省略する。

(注6) 『日本大文典』338頁に「例へば、何の幸これに如かうぞ(KI-KOZO)。」と用例を挙げている。

(注7) 『天正狂言本全釈』の解釈を参照。また、同書では「能・姨捨「弥陀光明にしくはなし」を挙げている。

(参考文献)

- ・森脇茂秀(二〇〇四)「動詞「似る」の意味用法について―平安初中期の仮名文を中心に―」(『別府大学国語国文学』46)
 - ・森脇茂秀(二〇〇六)「中古仮名文における漢文訓読語「ごとし」の意味用法について」(『語文研究』一〇〇・一〇二)
 - ・森脇茂秀(二〇〇七)「静態動詞「似る」の一形式―『源氏物語』の用例を中心に―」(『別府大学国語国文学』49)
- (もりわき・しげひで)